

をして之を慰安せしめしが、李勣は吐摩支の反情あるを認め、遂に討ちて之を鬱督軍山下に破り、其の部を滅ぼせり、太宗は此の勢に乗じ、更に江夏王道宗をして阿史那社爾等を率ゐ、契苾及び其の他の鐵勒諸部を窮討せしめ、親から靈州に幸して諸將を節度せり（以上、新唐書薛延陀傳、舊唐書鐵勒傳、兩唐書李勣傳、通鑑等に依る、但し舊唐書の記事は配列の間に頗る混雜の跡ありて整頓を要す）、而して先に見たる鐵勒十一部の靈州に來りて内屬を請ふに至りしは、實に此の時に於ける事なるを思はゞ、此の來歸が唐の威壓と招諭とに基きしものなること明かにして疑ふ可らず、而して唐は翌年正月に至りて、此等の諸部を直接府州の下に管轄したれば、之より各部は互に同様の關係に於て唐に隸屬するに至りしものにして、若し此等の一部が他の諸部を羈屬せしめんとする時は、其の勢力が獨り諸部を統一するに足るのみならず、又能く當時に於る唐の勢に拮抗するに足るものあらざる可らざりしなり、されば菩薩の時以來、諸部の間に優勢を持したる回鶻部が、吐迷度の時に至りても尙未だ薛延陀に代りて諸部の可汗たるを得ざりしは、其の勢の之を統ぶるに足らざりしが爲には非ずして、實に唐の勢力に抗するを得ざりしに因るものと云はざる可らず。

第四章 婆閏・比粟毒・獨解支の時代

貞觀二十二年吐迷度が其の姪烏紇の爲に殺さるゝや、其の子婆閏立ちて之に繼げり、婆閏の部酋としての在世が龍朔年間（六六一年—六六三年）に及びしことは、舊唐書廻紇傳及び冊府元龜卷九繼襲篇に「龍朔中婆閏死」と記さる、唐會要卷九には、龍朔三年二月瀚海都護府を回鶻部に置きしことを記したる續きに「婆閏卒、子比來栗代立」と記せるよりすれば、同書は婆閏の死を龍朔三年二月以後に置きたるものと認めらる、然るに通鑑は更に明確に之に關する年